

「菊花の約」考

一、「菊花の約」の典拠

「菊花の約」が何をもとにして形成されたか。これは既に明らかになったように思われるが、実は、参考の典拠に関しては、書物や研究者によっていろいろと挙げられた。作品の本質的・文芸的意義を闡明するにあたって、「何よりも先づそれが原拠である」といふ証左を正確に把握することが必要である。しかもその場合、構造の細部の一致、詞章上に於ける引用相承の痕迹等、明確な根拠を得るのでなければ、妄りに典拠呼ばはりをすべきではないのである^①と言われるような考え方を支持した。和漢の典拠について、後藤丹治氏の、精細に調査された「雨月物語出典細目表」^②を見ると、『古今小説』の「范巨卿鶏黍死生文」、『古今奇観』または『警世通言』の「俞伯牙弹琴謝知音」^③、『英草紙』巻二第三話「豊原兼秋音ヲ聴きて

国の盛衰を知る話」、『武家義理物語』巻二「御堂の太鼓うつた」、『万葉集』巻三「人麿ノ羈旅歌」、『剪燈新話』の「竜堂靈会録」が列挙されている。また、水野稔氏の「読本」^④の解説によれば、「西鶴の『武家義理物語』の△約束は雪の朝食▽などにも多少の暗示を与えたらしく、また『陰徳太平記』の記事をも背景に用いている」というのが見られる。しかし、高田衛氏の「雨月の世界」の図表に纏められた主たる典拠には『古今小説』巻十六の「范巨卿鶏黍死生交」しか載っていない。そのいずれも共通するので、「菊花の約」の主な典拠が確実に「范巨卿鶏黍死生交」であると思えるわけである。

以上から分るように、多くの中国の典拠と日本の出典がある。もしも、両国の文学に於ける相似の類を網羅すれば、もっと挙げられるものがある。例えば、すでに指摘された中国の『後漢書』の「列

伝下」にある「范式伝」、「蒙求」の「范張鷟交」「伯牙絶絃」、「今古奇觀」或は「古今小説」卷七の「羊角哀捨命交」のほかに、『清平山堂話本』或は『欽枕集』の「死生交張范鷟交」、『清平山堂話本』の「羊角哀死戰荆軻」、「後漢書」卷二十九列伝十九「申屠剛伝」があり、また、日本の『怪談登志勇』卷三「亡魂の舞曲」、「新選百物語」卷一「三条通りふしぎの出会」などがある。これらは殆ど同系列の作品と言ってよからう。同系列の作品に於いても、単なる文学的な偶然の相似でなく、必然的なつながりのあるものもある。「范巨卿鷟交死生交」は『後漢書』の「范式伝」をもとに敷衍し、再編成して出来上がったものであるが、『三言兩拍資料』^⑦を調べてみると、「范巨卿鷟交死生交」の物語は「搜神記」卷十一、『曲海総目提要』卷三にも見られる。同じく、「俞伯牙撫琴謝知音」について、『列子』、『荀子』、『呂氏春秋』、明の『小説伝奇合刊本』の「貴賤交情」^⑧なども参考になる。中国の原典をさぐるのに、『三言兩拍資料』と『話本小説概論』はとてもよい書物である。

勿論、両国の文学に於ける内在のつながりに留意すると同時に、中国文学と日本文学との関連をも追究する必要がある。例えば、「俞伯牙撫琴謝知音」の翻案作と言われる「豊原兼秋音を聴きて國の盛衰を知る話」もその例である。中国文学と日本文学に類似作品が現れたのは、文学の特徴であり、また、文学の互いの影響によつ

てもたらされた必然的結果でもある。創作そのものは、常に何か先行文学を参考に、手を入れ、書き改めて、新しい作品を生み出すのである。異なる時代には、内容に相似する作品があるの言うまでもなく、同じ時代でも同様の作品が各書物に収録されることも度々見られる。原典の研究は、その同系的なものをくりひろげ、内在の関係を把握することを要する。そうしてこそ、それが直接に、それが間接に絡み合っているかが明白になってくる。以上の多くの典拠の中で、「菊花の約」がどれに一番近いか。勿論、異議なく定説になつている「范巨卿鷟交死生交」である。『范巨卿鷟交死生交』と『菊花の約』にだけあって、あとの諸作品には全くない表現や用語がいかに多いかということにすぐ気づくであろう。また、「その翻案態度は、全体の構想においても、部分の材料とその配列においても、発想の手順においても、また言葉と文字の用い方においても、原典を惜しみなく吸収して、文字どおり『翻案文学』と呼ぶにふさわしいものであった^⑨」と鶴月洋氏が明らかに論じられている。

作者がもともとどんな書物を机の上に置いたかは分りかねるが、研究を進めるにつれ、裏付けのある推測によつて、典拠はだん／＼確実になってくるのである。研究者の立場、年代によつて、多少の差があるのも怪しむに足らぬのである。しかし、典拠を列挙する時に、主たる典拠と参考の典拠とに使い分けた方が穩当であろう。主

たる典拠が明らかになった時でも、参考典拠の研究も同じく見逃さない重要な意味を持つのである。日本古典文学の創作は近代文学と違って、大抵、歴史の人物・事件など、または先行文学を取り入れ、再編成する経由を辿ったことが多いようである。作品を研究する場合は、典拠を追求していく作業が要求される。だが、紛らわしく、断言できないこともある。その時に、何を基準にするかも大事なことである。つまり、主題構想、人物の設定、詞章撰取などのどれを基準に考え、どれに拘わるかというのであって、研究者の立場・方法・分析などによって、違ってくるのである。

二、「信義」に関する諸説

両作品が「信義」をめぐる物語を展開していくことは、共通の特徴である。構想上、簡素化・緊密化して集中的に主題を強調すると共に、言葉を巧みに表現されたのも効果的である。作品の始めに「信義」の発端として、軽薄な人との付き合いに注意させる口調のよい起筆で書き始め、また最後に後世を戒める結語で終るのもその例の一つである。それはつぎの如く、

青々たる春の柳、家園に種ることなかれ。交りは軽薄の人と結ぶことなかれ。楊柳茂りやすくとも、秋の初風の吹くに耐めや。軽薄の人は交りやすくして亦速なり。楊柳いくたび春に染れども、軽薄の人は絶て訪ふ日なし。

咨、軽薄の人と交りは結ぶべからずなん。

となっている。「全く書き出しがすばらしいのだよ」「それに結末のところをやつぱりもう一度、咨、軽薄の人と交は結ぶべからずとむ。と切ったのもいい」と谷崎潤一郎氏が、「菊花の約」のすきな理由を表明したのである。同じく、佐藤春夫氏も「あれの書き出しと結びが同じやうに出来てゐるのが、つまり起筆と結句でもう一度くり返しであるのがひどく好きだ」という同感だったのである。しかし、美文と認められる冒頭と結語は、典拠の「死生交」に基づいて書き改められたものである。「死生交」の冒頭は、

種樹莫種垂楊枝、結交莫結輕薄兒……楊枝不耐秋風吹、輕薄易結還易離。君不見昨日書來兩相憶、今日相逢不相識？ 不如楊枝猶可并久、一度春風一回首。

となっている。信義を中心とする両作品の同じ意味の起筆は、全体の内容に於いて、物語が始まる前のナレーションのようなものである。両文の語句について、秋成は「死生交」のこの文を下敷にししながら、美しい日本語に書き直した手腕を見ているが、特に原典よりもいいと言えない。それよりも、両作品の起筆はともにそれぞれの特徴のある美文というべきであろう。主題を逆説に置いて表現したのは、言うまでもなく、「死生交」の表現手法を借用したものである。「秋成は、いかなる目的で、作品にどのような効果を与

えることを期待して」^② いたかが問題であるが、中国の白話小説の「起句詩」と「結句詩」はいずれもアフォリズムの作用を持つものである。主題と一致しているのもあれば、逆説的になっているものもある。信義のない人と付き合わないようと逆説的に戒められ、それから感銘を受けさせ、鑑みとする「信義」の物語が始まるのである。

「菊花の約」の冒頭はただ形式の模倣ではなく、その形式から作者の意図をさぐってみれば、秋成が、命を捨てて、約束を守る話を読者の前に提示することによって、軽薄な人との交際に注意を喚起するという目的であろうと推測できる。同時に、原典と違って、「冒頭と照応した結末の警句は、そのような作者の意図をあらためて読者に知らせ」^③ たのである。冒頭と結語の意義は作者の意図に結ばれているの言うまでもなく、また読者によって、いろ／＼な解釈が生まれるのである。ともかくとして、当時の文学に於いて、その常套を脱した表現は意味深く、味えるものとしての新生面を切り開いたものと言えよう。

つぎに、人物の設定と事件の構造との関連について検討してみた。

「死生交」と「菊花の約」とを比較したところ、范式には不自然なところが多いように思われている。例えば、「范式が一度も張劭の母と会っていないことも不自然さを感じさせる。また、范式は妻

子を失念してしまっているのであるが、妻子の存在が、約束を失念してしまふ范式の心の在り方と、自刎して約束果たすという行為との間に異和感を生み、范式の誠実さに制約を与える結果になっていることも否めない」^④ とかいうようなことである。これらは、范式自身が正直に言った通り、

自與兄弟相別之後、回家為妻子口腹之累、弱身商賈之中。塵世滾滾、

歲月匆匆、不覺又是一年。向日鷄黍之約、非不挂心、近被繼利所牽、忘其日期。

となっている。これを読めば、なるほど、納得できるようだが、よく考えると、違った見解を持つことができる。范式の妻子が設定されたのは別に間違いではなく、范式が約束を失念した罪は妻の存在にあるのではない。張劭は読書に志して、嫁を娶っていないうえで、范式ももしも未婚であつたら、却って不自然になる。中国の春秋戦国の時に齊桓公が「丈夫三十而室、女子十五而嫁」と規定し、また、周禮地官媒氏によれば「令男三十而娶、女二十而嫁」というのである。唐・明・清の封建時代では男女は殆ど早婚だったのである。范式の商売の職業から見ても当然妻子を養うのである。妻子の存在を考えたうえに、命を捨てる決心を下し、行動に移ったのに敬服させられる。自分の命のみならず、妻子をも捨てなければならなくなる。范式は自分の妻への愛情と張劭に対する「兄弟の盟」の信義という

苦しい板ばさみの窮地に追込まれて、どちらを選択するかといった内心の矛盾と闘わなければならないわけである。信義のために自書した男同士の物語は本来悲劇であったが、単身の宗右衛門に比べれば、妻をおいて、自刎した范式の方が悲劇をクライマックスにまで推し進め、男同士の「信義」を一層高めたのである。ただし、何の倫理で、范式を残酷というほどの、信じられぬ行動に移させたかという問題であるが、中国では昔よく「骨肉之恩、手足之愛」と言われ、兄弟の情を「手足之情」に譬えられている。そこから封建時代 に於ける男の信念というものが現れているのである。左門は丹治に よって幽閉されて、約束を全うすることができなく、手落ちのない 完璧な人間像であるのに対して、范式は再会の日を忘れて、約束を 守れなかった無責任な人間像であるように思われるが、実は矛盾の 焦点を范式に絞ったのは容易ならぬ大胆な構想だと思ふ。単なる理 想像を求めるよりも、矛盾に存在する人間の両面性をほり出して、 生き／＼とした人間像が作り出されたのである。しかし商人である から信義を忘れやすく、武士の方が信義を忘れないと思われるのは 通常のものである。商人である信義の失脚に対する批判については、 中村幸彦氏が、「范式はいかん。なるほど、最後には約を果し得ぬ ことを恨みとし、自刃してその信義をつらぬいたといっても、約束 の当日まで気づかずにはいたのでは、少なくとも現代のわれわれに

は、信義の人とするに飲けるところがあると思われる」と指摘して おられる。これとは反対に森常治氏が、「范式が重陽の日の当日、 商売にかまけてその日が到来したのをすっかり気付かずにしたとい う筋立ては、人間のありようについての透徹した洞察として迫って くるのだ。その日を千秋の思いで待ちながらかつその日の来たのを 忘れない、などというのは秋成には悪いが中学校の芝居の域を出な い。一足す一は二になる、という単細胞的合理主義がそこにあるだ けである^⑧」と論じられている。氏には同じような体験があったのは 印象的であった。氏の管轄するある研究所に来る留学生の入所式の 日に、全員揃いで待っている。ところが、休日中の学校のことゆえ、 一日ずらして錯覚してしまって、そして、氏は「その場で自刃して 亡霊となって駆けつきたい気持ちでタクシーの中で冷汗三斗の思い をした次第である」。また、大輪靖宏氏が「一年先の約束であるた めつい忘れてしまったというのは自然なことでもあるが、それだけ 「菊花の約」のような約束に対する強い緊張感はなくなってしまう^⑨」と提出されている。人間は長所と短所があると同じように、 記憶と忘却とも人間の属性である。一年前のことをいち／＼覚えて いるわけにはいかない。例えば、一年前の今は何をしたかと言われ ても、思い出せないであろうし、「たとえその日が二人にとって意 味のある記念日であるにしても、一年中そのことばかり考えている

わけにはいくまい^⑭。われわれは忙しい時にとどき自分の誕生日さえも忘れることもある。これらは別に不自然なことではなく、却って自然なことではなからうか。

もう一つ考えておきたいことは、范式は普通の商人ではなく、學問に志し、科擧の試験を受けようとする「商人インテリ」であるということである。同じく、張劭も「農民インテリ」であるから、二人とも「選挙^{選挙}に応じようとする道すがら出会う。そこにはなにか運命共同体とでもいべき連帯感がある。なにも権力に抵抗するわけではない^⑮」。儒教の影響の深い中国では、その影響は知識人のみならず、社会の各層の人にも及んでいるから、農民や商人や「義理」を重んじるのは別に不思議なことではない。秋成がそれを学者と武士の身分に変えたのも、日本の場合にはいわゆる「義理」の儒教の影響が日本の上層階級に多くあったからではなからうか。作品は歴史や社会の中に存在し、またそれらを取材したものであるから、多くの読者に親しまれるわけである。

つぎに、両作品に於ける再会の定め方の相違は作品で分るように、范式と張劭の別れの日が重陽の佳節であるから、再会の期日が一年後の重陽の日に定められたのに対して、左門と宗右衛門の別れの日、左門が再会の約束を求め、兄の宗右衛門に期日の確認を懇願することによって、重陽の日に定められたのである。前者はきわめて

自然であり、後者は「原典におけるような必然性や妥当性はない。きわめて偶然的な取り決めであると言える^⑯」。しかし、期日の取り方が違っているにも、再会の日を重陽に決められたのはまったく同じであるという点に重みがある。「菊花の約」に於いては、「宗右衛門と左門にとつては、重陽の日というのは何の意味も持たない^⑰」。た

だ「菊花の節句が一番日安になりやすい日だったので九月九日と答えたにすぎない^⑱」かも知れない。だが、一年に節句がいろいろあるのに、なぜ、秋の重陽を決めなければならないのか、作品の主題に於いて、信義を果すための男二人の再会から考えてみれば、寓意性を持たせた作者の工夫ではなからうかと思う。偶然ながらも、単に何の意味もない日に命を捨てて約束を守るという意味である以上に、重陽は、「農曆九月九日。古以九為陽數、九月而又九日、故稱重陽」(辭源)というのである。そして、陽の数の「九」が重なる「重九」ともいうように男は陽であって、二人の男が再会する意味に於いて、非常に適切である。重陽は「男同士の約束をはたす」、また再会する日として、寓意的・緊密的ではなからうか。

また、何でもない約束を命をかけて守ったというところに、深くわれわれを感動させる要因は信義であるに違いないが、物語がだんだんクライマックスに展開していく要素は自然であるかどうかという点について見てみると、ただ一般の友人との約束を守るために

自害して会いに行くのではなく、病氣から救われたことを前提にして、義兄弟の契りを結んだ特殊な関係の上に成立つのである。張劭が范式を助ける場合と左門が宗右衛門を助ける場合に於ける對話から分る。「死生交」では、張劭は范式に向かつて、「君子勿愛、張劭亦是赴選之人、今見汝病至篤、吾竭力救之、藥餌粥食、吾自供奉、且之寛心」と言った。范式は「若君子救得我病、容當厚報」と答えた。「菊花の約」では、左門は近寄って、「士愛へ給ふことなかれ。必ず救ひまゐらすべし」と言った。それに対して、宗右衛門は「かくまで漂客を恵み給ふ。死すとも御心に報ひたてまつらん」と答えた。ここに示されたように、あとに断然と命を捨てて信義を守ることとの伏線が既に敷かれてあり、つづいて、張劭と范式の会話、宗右衛門と左門の老母の会話によって、張劭の「大丈夫以義氣為重、功名富貴、乃微末耳」、宗右衛門の「大丈夫は義を重しとす。功名富貴はいふに足ず」という信条が明らかにされたのである。この義理は儒教の「仁義道德」の現れである。しかも、この道德の概念は張劭が弟への返答によって詳しく説明されたのである。それは「人稟天地而生、天地有五、行、金、木、水、火、土、人則有五、常、仁、義、禮、智、信以配之、惟信非同小可。仁所以配木、取其生意也、義所以配金、取其剛断也、禮所以配水、取其謙下也、智所以配火、取其明達也、信所以配土、取其重厚也」というのである。

以上の一連のやりとりから分るように、危いところを救われ、熱病に倒れた面倒を手厚く見てくれた恩に酬いる思いが明らかにされたのである。普通の感謝だけでなく、人生での大切な立身出世の機会を失ってまで看護の手を差し伸べてくれた友情に対する感動をこめた「死生の交わり」である。范式が「当に厚く報ひべきことを容せ」と誓ったのち、報いることはしないのみならず、期日すら忘れてしまっている自分は自責や苦悩に迫られて、ついに亡霊になる決意をした。「死すとも御心に報ひたてまつらん」と誓った宗右衛門は幽閉されて、約束通りに実現できなくなった自分は武士の煩悶と苦悩に付き纏われた果てに自刎してしまった。つまり、命をかける最期までは、病いから命を救われたことをきっかけに、義兄弟の盟を結び、約束を忘れたとしても、或は結末を実現できないとしても、恩返し、義理を二人とも忘れていないことを辿って、信義の美談になったわけである。だから、物語全体の構想は自然的、合理的、緊密的である。

三、末段の構想に於ける両面性

武士社会の逸脱者である宗右衛門が命をかけて約束を守りぬくという「武士の信義」が主題となっている「菊花の約」の幕切れは、左門が赤穴丹治を一刀のもとに斬り殺した激しい高潮で終り、儒教

の信義と武士道の信義を一致させ、主題を首尾一貫、達成させたと思われる。しかし、「死生交」の結末では、范式が自刃して、亡霊となって千里の山陽まで飛び、約束を果たしたのに対して、張助は感動し、また、范式の幽魂の望みによって、范式の故郷楚州へ旅立ち、その場に慟哭し、悲痛な祭文をささげ、共に葬らんと人に頼んで自刃したというふうになっている。「死生交」の結果も同じく、「死生の交わり」といった主題を貫徹するエピソードであり、「死生交」の題にふさわしい、「手足之情」が首尾一貫した賛歌である。ただ「菊花の約」より悲惨であるように感じられる。秋成はこの二人だけの哀しい信義の結末を信義の為の復讐に書き改めて、終わらせているのである。この原作から離れた独自性を示す部分は、秋成の、背信を嫌う心情、猷身の信義の直情径行を主張する生き方を表したのではなからうか。しかし、この末段に於いては、まだ検討する余地がある。

まず、末段のあらすじを見ていくと、左門は老母に暇乞いをして、そして老母を妹の嫁入り先の佐用に頼んで、出雲の松江へ急ぐ。十日間で富田の城に着いた。義兄宗右衛門を死に至らしめた直接関係者の赤穴丹治と会って、公叔座の故事を話し聞かせ、不信を面詰して、丹治を斬り殺して遁走したのである。ここでは、左門が出雲へ行く動機は何か、なぜ丹治と会って、殺したのかなどの疑問が残っ

ている。左門が出雲へ行く理由は、母に語ったように、「兄長赤穴は一生を信義の為に終る。小弟^{まがひ}けふより出雲に下り、せめては骨を藏^{かく}めて信を^{しん}まうせん」となっている。左門は本来、丹治を切り殺す意図はなく、宗右衛門の遺骨を葬らんとするのであったことが分るように、この翻案にも「死生交」の投影がなされていると見られる。ところが、左門がなぜ本来の考えと違った行動を取って丹治に会いに行ったのかという点については、鶉月洋氏が、

おそらく左門は、初めから丹治を殺害しようと企図して出雲へ赴いたのではなからう。(中略)せめて亡兄の遺骨なりとも自らの手で葬って、その霊を心ゆくまで慰めようとした。義と情に養するやむにやまれぬ出雲行であったと考えていいように思う。ところが、実際に丹治と会って、その不信を面詰し、背信を弾劾しているうちに、左門の情は次第に昂ぶってきて、憤怒となり激怒となって遂に爆発、丹治を抜打ちに斬り殺してしまつたのである。それも、左門の義兄に対する猷身の愛情と信義を思い、その直情径行と、どちらかといえば多感多情な性格を思えば、ありうべきこと、当然の挙としてうなずけることであらう。左門にとっては、丹治を斬り殺したことによって、非業の死を遂げた義兄の無念を晴らし、その復讐を遂げた思いであつたに違いない。

と述べられている。これはとても参考になる説である。ところが、復讐であるならば、「左門の刃は、宗右衛門を死に至らしめる命令を下した尼子経久に向かわなければおかしい。しかるに、左門の怒りはまったく経久には向けられていない」と大輪靖宏氏が指摘され

ている。だから、左門に「経久を亡ぼす宗右衛門の遺志を継承するところが少しも見えない。しかも、丹治は確かに、従弟の宗右衛門と経久との間で板ばさみの状態におかれ、結局、経久の命令に従って、やむをえない行動を取ってしまったとしか見られない。本来、丹治を殺害しようと企図していないのに、ただの憤怒と爆発で、急に斬り殺す気持になったのだけでは、不自然さを感じるのである。そして、面話を聞いた「丹治只頭を低て言なし」に対する爆発は、丹治の不服による爆発ではなく、自分の興奮による爆発としか考えられない。それから、左門が丹治を殺害した後に通走したのは何を意味するか、「追手につかまれば、殺されるのは当然であろう」から、「人間のもっている△死への恐怖▽以外、何ものでもないではないか」と思われるわけである。しかし、左門の口を借りて、丹治の、宗右衛門を軽視して、経久にばかり向いている不誠実さを責めるのが秋成の本心であろう。そのために、公叔座の例を持ち出したのである。

この故事は、『史記』六十八「商君列伝」から殆どそのまま引いてきたのである。「こういう故事を引いて話を進めるというテクニックは、わが国でも王朝の物語や戦記文学などが常套的に用いた技巧であり、秋成はそれを踏襲したわけでもある」と鶴月洋氏は見ておられる。秋成が『史記』に見える商鞅・叔座の故事を引いて展開

していったことはとても効果的である。まず、この引用は、張劭と范式の農民・商人の身分を左門と赤穴の儒者・軍学者の身分に変えた構想と首尾一貫していると言えよう。魏王・叔座・商鞅の君臣、上下関係から、叔座は軍機学者であることが分るように、赤穴が武士の軍学者と設定しないと、この引用の意味が浅くなり、或は成立たないかも知れない。少なくとも牽強附会になりかねないと思う。もう一点は、儒者の左門はさすがに教養をそなえたインテリであり、中国の学問の造詣が深いところを見せているのである。だから、左門によって、この漢学の知識を持ち出されたのはごく自然である。ある意味では、主人公左門を儒者と設定したところから左門によって自分の漢学の素養を見せたように、「菊花の約」は、秋成が「自分の傾倒する国学からはなれ、儒教的な信義を中心主題として描いた」作品である。要するに、この結末はほかと同じく、秋成の思い付きではなく、構想を緊密化して、集中的に主題を強調することを計算に入れた設定であると考えられる。

しかしながら、「商鞅叔座の故事を引いて、丹治の罪状を問う」とかいうような論理的・倫理的、或は信義的なところから考えるならば、どうであろう。重病の床に臥した公叔座は、見舞に来た魏王に、誰を宰相として国政をゆだねたらよいであろうか。私のために

教えてくれと頼まれた時に、才能のある商鞅を推挙したと同時に、もし商鞅を用いないならば、彼を殺してでも、他国へ行かせてはならないとまで言った。一方、公叔座はその後、商鞅を呼んできて、お前を推挙したが、王は聞き入れられないようなので、登用しないのならば、殺してしまいなさいと教えたから、お前は早く他国へ逃げろと告げた。これはいわゆる君を先に、臣を後にする「君臣の道」である。秋成は、恐らくこの「君臣の道」に準じて、丹治が経久の命令を受けてから、すぐ宗右衛門にそのまま伝え、逃がす行動を取るべきだということを言いたいのであろう。この公叔座が、両方に対して、自分の言ったことをそのまま言い伝えたところには誠実な面があるように見えるが、しかし、国のために商鞅を登用しないなら、殺してでも、他国へ行かせてはならないと信じて言ったのちに、商鞅に逃げろと教えたのは、いったい誰のためであろうか、国のためか、それとも商鞅のためか、或は魏王のためか、その誠実さ、また信実さというものはまったく無視されてしまったのではなからうか。

「菊花の約」は中国の「死生交」を借用して、戦国時代を背景に、当時の武士を諷刺した立派な翻案作である。そこに描かれた人間の強さと弱さ、美しさと哀しさという両面性によって、人間がいかに生きるべきかという問題を「輕薄の人と交はり結ぶべからず」に絞って主張されたのであろう。

「菊花の約」考

補記

兩作品の冒頭の語句については、森田喜郎氏が、順をおって詳細に論じられた。それをまとめてみると、「菊花の約」の方がいきいきと、具体的に、緊密的に、語句を重複せずに書かれているという点⁽¹⁾であった。「菊花の約」の冒頭は日本語に忠じて、書き改めた秋成の手腕を見せているのは言うまでもない。が、「死生交」のそれは、七言になっていて、それに制約されていることが案外難しい面もある。七言とはいえ、白話の七言自由体であつて、平仄や韻をふむ漢詩の七言絶句ではない。よく分析してみると、原典の冒頭は八句(五句目のみ十字)になっていて、四組と見ればよい。第一組は主張としての発句、第二組は「重楊枝」と「輕薄児」の特徴を表し、発句に対する答え、第三組は平素の例を鑑みに挙げ、第二組に対しての具体的な説明、第四組は「楊枝」と「輕薄児」との違いを取り出す結句である。特に、「垂楊枝」のことは見事である。風に吹かれて、ふらふら揺れている不安定な様子が目に見え、「輕薄児」の比喩としての対象がなかなかいい。自然の現象を見取って、人間と比較して人を戒める馮夢龍の発想に感心を覚えざるをえない。「菊花の約」の方が五句になっていて、その中に原典の第三組の具体的な説明が省略されたのである。本来は楊柳に托して人間の交際に注意させるのが目的である。だから、「全体」としては『死生交』でのやや観念的な表現が『菊花の約』では具体的に躍動する文になって⁽²⁾いるとはかぎらない。むしろ、原典の方が優れているのではないかと思う。

「死生交」の第一句にある「種うる」と「結ぶ」の繰り返しの問題であるが、ここでは、仮設条件のような表現としての繰り返しである。特に白話になってから、一字の単語が少なくなってきた⁽³⁾。日本語の方には、漢語と和語もあるから、表現上、独特な長所に恵まれている。例えば、「青々たる春の柳。家園に種ることなれ。交りは輕薄の人と結ぶことな

かれ」を中国語に直訳してみると、「青春青柳莫種家園、交莫結輕薄人」になる。第一句はまだよいが、第二句はなんとも拙文である感じになる。「交」の一字がなんとなく足りない。やはり、「交」の上か、下に一字をつけ加えなければならぬ。例えば、「結交」か「交友」かにしなければ(4)ませぬ。なぜなら、現代中国語の「単音語の意義は広く、複音語の意義はせまい」からである。また「一般に単音語は語意が軽く、複音語は語意が重い」(5)。この「交」の上か下に他の字をつければいろいろな意義が成立つ。対比表現をする場合に、繰り返されることもある。杜甫の「貧交行」の「翻手作雲覆手雨、紛紛輕薄何須數、君不見管鮑貧時交、此道今人棄如土」には「翻手」「覆手」が対比的な表現になっている。もう一人の崔敏童の「宴城東在」の「一年始有一年春、百歲曾無百歲人、能向花前幾回醉、十千沽酒莫辭貧」には「一年」と「百歲」が繰り返されている。同じく原典の「輕薄易結還易離」と「今日相逢不相識」、「一度春風一回首」は「易」と「相」「一」の三字も繰り返されている。要するに、両国語は系統が違っているから、比較しにくいところが当然幾分ある。つまり、その自国の言葉に対する親近感・表現方法・ニュアンスなどに対する理解力の潜在意識があるからである。それでも、「菊花の約」の冒頭が日本語の表現の特色に合わせ、独自の風格が出されていることは否めない。勿論、それを日本化しないと、日本人に認められる美文にならないと思う。

秋成が中国白話小説の技巧を取り入れ、日本の小説に用いることによって、古典小説を刺激するような新しい気風を作り出したのであろう。

〈1〉『雨月物語』の意義』(『上田秋成の研究』笠間書院刊、昭和五十三年十一月)。

〈2〉 ①に同じ。

〈3〉『中国語研究学習双書7—中国語の単語の話 語彙の世界』(香坂順一、光生館、昭和五十八年六月二十日)。

〈4〉〈5〉 〈3〉に同じ。

注

① 『雨月物語出典をさぐる』(『解釈と鑑賞』昭和三十二年六月号)、傍点は原著者。

② 注①に同じ。

③ 『今古奇観』の第十九卷、また『警世通言』の第一卷。

④ 『新版日本文学史近世Ⅱ』(至文堂刊、昭和四十六年九月)。

⑤ 『古今小説』巻七の題の下に「二本作羊角哀、死戦刺荆」の注がある。

⑥ 『中国通俗小説書目』(孫楷弟、人民文学出版社、一九八二年十二月)による。

⑦ 『三言兩拍資料』(譚正驥、上海古籍出版社、一九八〇年一月)。

⑧ 『話本小説概論上・下巻』(胡士莹、中華書局、一九八〇年)。

⑨ 『雨月物語評釈』(鶴月洋、角川書店、昭和五十七年六月)。

⑩ 『あさましや漫筆』(『世紀』大正一三年二月)、『秋成』(日本文学研究資料叢書、有精堂)にも所収。

⑪ 注⑩に同じ。

⑫ 『菊花の約』(『雨月物語構想論』勝倉寿一、教育出版センター、昭和五十二年九月)。

⑬ 注⑫に同じ。

⑭ 『秋成』(日本古典鑑賞講座第二十四卷、角川書店、昭和四十六年九月三十日)。

⑮ 『到達のための作法へ『菊花の約』論』(『解釈と鑑賞』四十号、昭和五十一年七月)。

⑯ 『上田秋成 その生き方と文学』(春秋社、昭和五十七年七月)。

⑰ 『上田秋成文学の研究』(大輪靖宏、笠間書院刊、昭和五十一年一月三十日)。

19 注16に同じ。

20 注12に同じ。

21 注18に同じ。

22 注17に同じ。

23 注9に同じ。

24 注17に同じ。

25 「雨月物語『菊花の約』考」(『立正大学国語国文』森頭治、昭和五十六年三月十七巻)。

26 注9に同じ。

27 注25に同じ。

あとがき

『雨月物語』の各篇の研究は、多くの先学の精緻な典拠考証によって、大きな成果を収められ、比較文学の研究に基礎を置いたのである。翻案は翻訳と違って、単に詞章上の相似によって作品を分析するのが不十分である。たとえ翻訳であったとしても、原文からずれるところもある。だから、これからは、それにこだわることなく、この枠を超えて、主題、思想、美意識、芸術的価値の構想の研究に取りくむべきである。それは、影響者と被影響者の価値の良し悪しを論じるのではなく、むしろ両作品の価値観点、社会背景及び文学作家・作品の思想をさぐるのである。将来の課題として、全面的に広げていくように、中国の典拠をもっと幅広く取り調べ、中国文学

の視点から比較していきたい。また、学際領域の知識を充実させ、歴史・文学に於ける両国の内在と外在の関連とを探ってみたい。拙論の中に誤りがあると思うが、御教示を期待する。

拙論は修士論文の第一章であり、編集枚数の関係で、それを短縮した。『雨月物語』の研究は既に戦前から詳らかに行われた。多くの先学の研究成果をもとに、『雨月物語』から、全体にわたって中国白話小説の影響を受けた「菊花の約」、「夢応の鯉魚」、「蛇性の姪」を取り出して、主に「范巨卿鶏黍死生交」、「薛録事魚服證仙」、「白娘子永鎮雷峯塔」と詞章上比較してみた。研究にあたっては、中村幸彦氏校注の『上田秋成』(『日本古典文学大系』岩波書店刊)、鶴月洋氏の『雨月物語評釈』(『日本古典評釈叢書』角川書店刊)、高田衛氏校注の『雨月物語』(『日本古典文学全集』小学館刊)と、中国の許政楊校注の『古今小説上』(人民出版社)、作家出版社編輯部校注の『警世通言』(作家出版社)、顧学頌校注の『醒世恒言下』(作家出版社)を使用した。中国のそれらは一九五六・八年に出版された旧体字の版本である。その後出版された簡体字の版本は文字の比較に不便だったからである。そして、荒井秀夫氏によって始めて出版された、中国に残らなくて日本にのみ存している「国立公文書館内閣文庫蔵本」(ゆまに書房発行)の「三言」「二拍」の善本の影印の版本をも使った。典拠との比較によって、諸本の注は、部

分的ではあるが、年代や校注者により、違っていたり、幅広くなったりするようである。特に『上田秋成集』（『日本古典文学大系』岩波書店刊）の「夢応の鯉魚」の「注三四」の「薛録事」と『雨月物語』（『日本古典文学全集』小学館刊）の「注三二」の「薛録事」の御指摘は検討する余地がある。その「幹聴カズンテ縄ヲ以テ我ガ鯉ヲ貫ク」は「薛録事」に無く、「魚服記」にあるのだからである。また、秋成の作品にあるいわゆる異体字というものは、中国原典の中にもあるのに気が付いた。これも将来の典拠研究に役立つのであろう。勿論、部分的撰取考証に留まることなく、舶来書籍の文献学と重ねて考証を行うことも必要である。のみならず、内容の主題・主人公の設定と事件の構想、小説の表現手法等の全体構造に着眼しながら、両国の社会・宗教・慣習・価値観・作品の思想等の比較を試みた。『雨月物語』は、ちゃんとした文学様式の作品として、人々に愛読されている。その価値は、単なる翻案の目的にあるのではなく、和漢の典拠を動員して、どのように日本的な自然と人間、日本的な風土性といったようなものに変えたかということにあるのである。その創意工夫から、両国の社会に於ける風土などの相違をさぐることができる。この研究の新参者たる私が、中国人の一人としての視点から、はばかりなく、自分の観点と調査を発表したが、それはとても未熟なものであった。今後の研究は、諸専門家の御指導を乞いたく